

2013年度
事業計画書

2013年4月 1日から
2014年3月31日まで

公益財団法人 国際文化会館

I. 多文化間の知的対話を通して相互理解の促進を図る事業

21世紀に入り、より複雑化してきた諸課題を見据え、異なる文化・社会的背景や研究者、ジャーナリスト、NGO/NPOのリーダー、作家、芸術家といった細分化された専門を超え、人文・社会・自然科学の諸分野をつなぐような思索と対話の場を創出し、領域横断的かつ複眼的、重層的な知的ネットワークの形成を図る。(会館の中核的事業)

1. アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム (ALFP)

会館の事業の中心に位置するプログラムの一つであるALFPは、1996年度より独立行政法人国際交流基金との共催により、これまで95名のアジア諸国のさまざまな分野で活躍する知識人を招聘してきた。滞日中のフェローたちは、会館で寝食を共にし、アジア地域や世界に共通する諸課題について議論する知的共同作業に参加する。このような知的対話を通じて、地域内ならびにトランスナショナルな理解と協力を促進し、アジアのパブリック・インテレクチュアルおよび日本のカウンターパートとの緊密なネットワーク構築をめざす。

2013年度は、6～7名のフェローを招聘し、「The Future of Asia, the World and Humanity after Development and Growth」という共通テーマのもと、9月9日から11月8日まで主として会館に滞在し、日本を拠点とする学者、ジャーナリスト、芸術家、NGO/NPOリーダーたちとのワークショップ、リソース・セミナー、フィールド・トリップなどに参加する。

2. 牛場記念フェローシップ

現代の複雑化した国際情勢を読み解き、学術研究、ジャーナリズム、外交などの分野で卓越した業績をあげ、国内外で広く認知され、時代の一步先を見据える世界的なオピニオン・リーダーを年に1～2名招聘し、グローバル社会が直面する諸課題について意見交換を行うことにより、日本と諸外国との相互理解の増進を試みる。1～2週間の滞日中、フェローは公開講演会や専門家を中心としたワークショップなどに参加する他、各フェローの希望に応じて非公式な対談や意見交換の機会を設定する。

2013年度は、日本学術会議との共催で、4月3日～13日の11日間、イタリアの哲学者アントニオ・ネグリ氏の初来日が予定されている。その間に、2つの公開シンポジウムを開く予定。会館では、4月12日、ネグリ氏の講演と姜尚中氏との対談を公開で行い、内容は後日、NHK教育テレビで全国放送を通して、できるだけ多くの方に聞いていただきたいと考えている。

本フェローシップは、牛場信彦記念財団の残余財産の寄贈により実施している。

3. 日印対話事業 (Japan-India Distinguished Visitors Program)

日印平和条約の締結から60周年を迎えた2012年に、会館と国際交流基金は、日印両国が主軸となり、アジア・太平洋の安定と平和を築くための対話の「場」を創出するため、新たな日印対話(人物招聘)事業“Japan-India Distinguished Visitors Program”を立ち上げた。

本プログラムは、社会のさまざまな問題の解決に向けて、現状を打破するための新しい価値やアイデアを提案している、インド国内外において、政治・経済・文化・学術・科学など幅広い分野で影響力のある人物を年間1～2名、一週間程度招聘する。フェローと関係者とのさまざまな対話を通じ、日本とインドの間の人的パイプを強化することを目指す。

4. 日米国際金融シンポジウム

ハーバード・ロースクール国際金融システム・プログラム(PIFS)との共催により、日米国際金融シンポジウム「21世紀金融システムの構築:日本と米国にとっての課題」を開催している。本シンポジウムは毎年日米交互で開催され、日米両国の政府高官、政治家、金融機関幹部、シンクタンク研究者、法律家、コンサルタント、研究者、メディア代表者など約120名が参加して、2日間にわたって国際金融システムの機能と安定化にかかわる問題についてオフレコの討議を行う。

2013年度は、第16回目となるシンポジウムを10月に米国で開催する予定である。

II. 交流の主体となる人材の育成

創造的な知的対話を行うためには、自己の社会や文化の基盤の上に立ち、広く総合的な視野を身につけた主体的な対話能力を持つ人材が必要である。こうした人材の発掘と育成に資する、効果的で地道なプログラムを行う。

1. 新渡戸国際塾

企業、NPO/NGO、官公庁、研究機関などの若手社会人(20代後半～40歳まで)を対象に、国内外の国際的な現場で活躍できる人材の育成を目的に開催され、2012年度に第五期を終了した。塾長は明石康(国際文化会館 理事長)、コーディネーターには渡辺靖氏(慶應義塾大学 SFC 教授)を迎え、2013年度の第六期は6月から12月まで、全13回の講義を行う予定である(そのうち7回は公開講演)。各回の構成は、講義と質疑応答(90分)ならびに講師と塾生との自由討論(140分)となっている。15名の塾生は、書類選考(願書・小論文)および面接により選考される。

2013年度も、公益財団法人渋沢栄一記念財団、財団法人MRAハウスの助成を受けて実施する予定である。

2. 日米芸術家交換プログラム

毎年、米国の芸術家5名が来日し、日本の芸術家との交流を通じて創作活動に従事する。全米芸術基金(US National Endowment for the Arts)、文化庁の協力のもと、日米友好基金(Japan-United States Friendship Commission)の主催。1978年のプログラム開始時より、会館は、来日時のオリエンテーションならびに滞日中の活動全般にわたるサポートを行っている。

なおフェローの滞在期間は、2012年度より5か月から3か月に短縮となった。

2013年度は、以下の5名のアーティストが選出された。フェローの活動や日本人芸術家とのコラボレーションの発表は、IHJアーティスト・フォーラム(助成:日米友好基金)として開催する予定である。

- ・カール・バークハイマー Karl Burkheimer (ヴィジュアル・アーティスト)
- ・ジョン・ジェスラン John Jesurun (劇作家、舞台芸術家)
- ・マリー・ムツキ・モケット Marie Mutsuki Mockett (ライター)
- ・ブルース・ロジャース Bruce Rogers (ライター)

・ウィリアム・ローパー William Roper (作曲家)

3. ビジネスパーソンのための「教養講座」(新規)

ビジネスパーソンの多くが、深い教養、とりわけ日本の歴史や文化に関する教養を身につけたいと考える中、若手ビジネスパーソンや法人会員の社員などを主な対象に、会館の人的ネットワークを活かし、一般的に行われているビジネスセミナーとは違った、より深く、かつ総合的な教養を身につけるための機会を提供する。

III. 知的交流に関する情報発信

会館の知的交流の事業並びにその成果を広く一般に周知、共有し、国際理解の促進を目的に、多様なパブリック・プログラムの開催や、出版を含めた情報発信を行う。

1. パブリック・プログラム

(1) アイハウス・アカデミー

各界各分野で主導的な役割を果たし、21世紀の叡智と言われる方々((緒方貞子氏、昨年京都賞を受賞されたガヤトリ・スピヴァク氏、アントニオ・ネグリ氏など)を招き、公開講演会としてこれまで開催してきたが、2013年度からは、日本に係わる国際的な課題をテーマとしたシンポジウムとして形式を変えて開催することを予定している。

内外の有識者を講師に迎えて、国際的、比較的な分析に重点を置いた問題提起型シンポジウムを提供する予定である。

(2) アイハウス・ランチタイム・レクチャー

広く一般の方々を対象として、第一線で活躍中のさまざまな分野の専門家を招き、タイムリーなテーマについて解説していただく内容の講演会を開催している。

2013年度も、4～5回の講演会を開催する予定である。

(3) japan@ihj

在日外国人を主な対象に、日本(文化、社会、経済、政治等々)理解の増進を目的に開催する。講師は、会館がこれまで築いてきた、内外の専門家の協力をもとに実施。いずれの講演も通訳をつけずに英語で行うことが特徴となっている。

2013年度も、7～8回の講演会を開催する予定である。

(4) 東京国際文芸フェスティバルー文芸の力は国境を越えて振動するー

東京をニューヨーク、ロンドン、パリと並ぶ世界の文芸拠点のひとつとして、また日本と世界の出版・文芸業界の橋渡し役を目指す事業である。具体的には、海外から作家らを招き、本(小説)を通して、異なる文化の共通点を浮かび上がらせ、また対話でさらに両者を近づけるとことを目指している。

2013年度は、会館は、本フェスティバルの中で行われる日本理解の促進など、会館のミッシ

ョンに合致するテーマのプログラムの開催に協力する予定です。

(5) 日本の芸術文化の発信「鼓童」

滞日中の外国人に、質の高い日本の文化芸術を体験する機会を提供するため、2013年度は和太鼓演奏の先駆的存在で、世界に和太鼓の魅力を広めた「鼓童」の公演を秋に開催予定である。

2. 出版

(1) 公益信託長銀国際ライブラリー

2000年7月に設定された、「公益信託長銀国際ライブラリー基金」(前身である長銀国際ライブラリー財団の残余財産を基金として事業を継承)による事業である。政治・経済・社会・文化などの日本人著作を毎年2冊選定し、英訳・刊行して広く内外に配布し、国際社会の中での日本理解の増進に資することを目的としている。

2013年度は、以下の英語翻訳版を刊行し、内外の大学図書館、研究機関、公共図書館、文化施設など、海外2,800カ所、国内700カ所への無償配布を予定している。

- 1、若松英輔著『井筒俊彦:叡智の哲学』(慶應義塾大学出版会、2011年刊)

Izutsu Toshihiko: In Search of Wisdom [tentative] by Wakamatsu Eisuke

翻訳者: Jean Connell Hoff

- 2、三浦展著『第四の消費:つながりを生み出す社会へ』(朝日新聞出版、2012年刊)

Japan's Fourth-Generation Consumerism: The Coming Connection Society (tentative)

by Miura Atsushi 翻訳者: Dana Lewis

2013年度は、以下の図書を英語翻訳をする(刊行は2014年度になる予定である)。

- 1、今橋理子著『秋田蘭画の近代:小田野直武「不忍池図」を読む』(東京大学出版会、2009年刊)

A New Reading of Odano Naotake's "Shinobazunoike-zu": The Akita Ranga School and the Cultural Context in Tokugawa Japan [tentative] by Imahashi Riko

翻訳者: Ruth S. McCreery

(2) アイハウス・プレス

2006年より、出版メディアを通して、①会館のプログラム活動の成果を広く一般に発信するとともに、②海外における日本理解の増進を目的として、日本人による名著を英訳・刊行して発信する活動を基本として実施している。

2013年度は、長銀国際ライブラリーで刊行された以下の1冊をマーケットで有償配布する予定である。

田中優子著『布のちから:江戸から現在へ』(朝日新聞出版、2010年刊)

The Power of the Weave: The Hidden Meaning of Cloth by Tanaka Yūko

翻訳者: Geraldine Harcourt

(3) 定期・不定期刊行物

2012年度事業の年次報告書『歩み(日本語)』、『*Annual Report*(英語)』を刊行する。
また、会館主催のプログラム内容の記録を中心に会館の動きを伝える機関誌(『会報』、*Bulletin*)を刊行し、会員および内外の国際交流団体や図書館に発送する。

2013年度は、これら刊行物の将来的な電子化に向けた調査研究、また刊行物が会館の広報的役割をより果たせるべくその内容や発行時期の見直しを図る予定である。

IV. 調査研究プロジェクト

1. 外交問題夕食懇談会

明石 康理事長がホストとして毎回ゲストを迎え、外交問題に関心の深い方々にご参加いただき、インフォーマルな雰囲気の中で行う、オフレコの懇談会である。参加者は、学者・研究者、外交実務経験者、NPO・シンクタンク関係者、メディア関係者、経済人など、職種や専門を超えた少数に限定している。使用言語は日本語または英語で、いずれも通訳はつけずに行う。

2013年度も、5～6回の実施を予定している。

V. 図書室

日本研究の専門図書室として、海外の日本専門家と国際文化会館をつなぐ重要な役割を担っている。

2013年度は、図書室の通常業務に加えて、2010～2012年度と3年計画で実施した、「日本専門家ワークショップ」の発展継承事業として、国立国会図書館、国際日本文化研究センターなどの関係団体機関と連携し、「海外の若手日本研究者の育成のあり方(仮題)」について事業を行う予定である。